

Tierra Eco & Future Summit 2026 にお申込いただいた皆さんへ

午前の部は、日本を代表するドキュメンタリー写真家の大石芳野氏にお話を伺います。

大石氏は半世紀以上にわたり、ベトナムやカンボジア、そして広島や長崎など、世界中の過酷な戦禍や激動の歴史の現場へ足を運び続けてきました。そこに生きる人々の苦しみだけでなく、逆境の中でも失われない「人間の強さ」や「生命の尊厳」をカメラに収め、写真を通して私たちに世界のリアルを伝え続けています。

なぜ、大石先生は過酷な現場へ赴き、レンズを通して世界の真実を伝えようと思ったのか。そして、一枚の写真を通してどんな未来を目指しているのか。この資料を読んで、自分なりに考えながら当日のお話を聞いていただくと、より理解が深まります。

レンズを通して見つめる「他者への想像力」

「美しい物言いで片付けられない、本当の姿を伝える」

大石先生は、教科書や通り一遍のニュースだけでは決して見えてこない「人間の本当の目や心」を写し取ってきました。

例えば、長崎の地には22年ものあいだ通い続け、原爆の被害に遭いながらも、たくましく厳しく人生を生き抜いてきた人々の姿を記録しています。長崎はよく「祈りの長崎」という美しい言葉で語られます。しかし、大石先生が出会った人々の心には、心静かに祈るだけでは片付けられない、深い苦悩や怒り、そして生き抜くための不屈の強い光(面魂(つらだましい))がありました。

悲しい出来事や残酷な現実から目を背けるのではなく、その奥にある「人間としての誇り」を見つめること。大石先生の写真や言葉に触れると、「世界に生きる自分以外の誰か」を想う、優しい「想像力」のスイッチがカチッと入ります。

「1枚の写真から、小さな一歩が始まる」

社会を変えるような大きな行動も、すべては「知ること」「相手の痛みを想像すること」から始まります。大石先生が時間や国境を越えて集めてきたメッセージを、今年は私たちが「命のバトン」として受け取る番です。一人ひとりの心の認知が変わり、他者を想う想像力が広がれば、より良い未来を創り出す「小さな一歩」を踏み出すことができると、私たちは信じています。

講演者 大石 芳野(おおいし よしの)氏 プロフィール



ドキュメンタリー写真家。

東京都出身。東京工芸大学短期大学部写真技術科卒業。

世界各地の戦禍や内乱の傷跡、激動の社会で誇り高く生きる人々をテーマに取材。半世紀以上にわたり命の尊厳を写し続ける。2026年2月には、社会的評価の最高峰の1つ称とされる日本経済新聞『私の履歴書』を執筆し、日本中に大きな感動と反響を巻き起こした。

主な受賞歴:

土門拳賞(映画・写真界の最高峰の賞の一つ)

紫綬褒章(芸術や学術で傑出した貢献をした人に国から贈られる章)

旭日小綬章(その活動が社会や人々に長く貢献し続けたことに対して、国家から認められた最高峰の勲章)

子どもたちに伝えたいこと(メッセージ)

「時間を巻き戻すことはできず、この世からいなくなった人に会うことはできないから。」

大石先生はいつも、「もっと早く来て人々の話を聞いておくべきだった」と悔い続けながら、追われるように写真を撮ってきたと言います。歴史の波に消え去ってしまいそうな小さな声、傷を抱えながらも今日を必死に生きる人々の姿を、大石先生は「今、自分がやらなければならないこと」として行動に移し続けてきました。

最初から壮大な計画があったわけではありません。「この人の生きた証を残したい」「世界のリアルを伝えたい」という、その時その時の誠実な思いを行動に移してきた結果が、半世紀にわたる大石先生の道となり、世界中を動かすメッセージになりました。

未来がどうなるか分からないとき、何が正解か見えないときでも、目の前の現実から逃げずに「一歩」を踏み出せるか。いかなる困難や逆境にもたじろがない心(折れない心)を、世界の子どもたちの強い瞳から学んでみましょう。

さあ、一緒に、みんなが他者を想い、踏み出せる小さな一歩を考えてみよう。

大石芳野「私の履歴書」日本経済新聞 より

(1) 人々

つぶらな瞳に深い悲しみをたたえていたパパニーは元気になっているだろうか。戦争で負傷して帰還し、将来のためにと英語を勉強していたニコライはその後どんな人生を歩んだのだろうか。私の「広島のおかあさん」清水ツルコさん、あなたのことが大好きでした。会えるものならもう一度会いたい――。

カメラを掲げて世界を飛び回り、たくさんの、本当にたくさんの人に出会ってきた。何度も訪ね、長いつきあいになった人もいれば、つかのま一緒に時を過ごしただけの人もいる。子供たち、女性たち、老人たち。その一人ひとりのことが、自分が撮った写真を見るとありありと思い浮かぶ。彼らの言葉、まなざし、しぐさ。その一つ一つが心に深く刻まれている。

私はドキュメンタリーの写真家だ。撮りたかったのは普通の人々の姿だったが、何かに導かれるように戦争や災禍を経験した国や地域を数多く訪れることになった。レンズの向こうにいたのは平凡な人生を望みながら、しかし、戦争や内乱、あるいは巨大な災厄に運命を狂わされてしまった人々だった。

米国との戦争で数多くの犠牲者を出したベトナム。独裁者による残虐きわまりない弾圧に虐げられたカンボジア。旧ソ連が仕掛けた「醜い戦争」で敵味方なく傷ついたアフガニスタン。原子力発電所の事故で多くの人々が暮らしを奪われたチョルノービリ（チェルノブイリ）。

あるいは原子爆弾によっておびたしい数の命が失われた広島と長崎。凄惨な戦場となった沖縄。民族浄化というおぞましい悲劇の現場アウシュヴィッツ。

20世紀の暗い歴史の舞台に、心と体に傷を負った人たちが今もいる。苦しみながらも懸命に生きてきた彼らから話を聞き、その心の中にある一番重いものを写真に写したいと思ってきた。

「これが人間のやることか」。そう思わずにはいられない話をたくさん聞いた。人間を信じられず、虚無にのまれそうになる瞬間がたびたびあった。人間不信を深めればそれは哲学に昇華するかもしれない。だが私というちっぽけな人間には哲学に到達するなどとうてい無理だ。

小さい自分にできることをするしかない。それは伝えること。他者の苦しみを自分が苦しむことはできないが、誰かの苦しみを知り、その誰かと「共にある」ことはできるのではないか。写真に写った人と写真を見る人が結びついてほしい。それが私の一貫した願いである。

私は残酷なものを伝えたいわけではない。だがこの連載では率直に語りたい。つらい話が折々に出てくるが、それがこの世界の現実である。目を背けないでほしい。

ウクライナで戦争が続き、パレスチナ情勢も先が見通せないまま明けた2026年。米国が他国を威嚇する挙に出ている。大国が歴史に学んでいない。世界は取り返しがつかない方向に進むのではない。暗澹（あんたん）とする。

この短い連載で伝えられることはわずかでしかない。ただ言えることは、戦争は終わっても終わらないということ。人間が引き起こした災禍は長きにわたって人間を苛むということだ。

こんな時代に私たちは希望を語れるだろうか。

私は私の人生ではなく、自分がこの目で見えてきたものについて語るつもりだ。望ましい世界とはどのようなものか、みなさんとともに考える機会になればと願う。

(4) 心の約束

1966年春、私を含め8人の学生がベトナム・カンボジアに渡航した。

目的は学生同士が討議し理解と交流を深めることにあった。南ベトナムでは軍政色の強い体制下で米国の本格介入が進んでいた。一方、共産主義体制の北ベトナムでは米軍の空爆が続いていた。

南ベトナムの首都サイゴンの空港では遺体が運ばれているのを目にした。人々の目に強い緊張が感じられた。兵士の遺族に会い、孤児院を訪ねた。墓地に行った時のこと。写真を撮ろうとカメラを取り出すと、案内してくれた人にとがめられた。「写真を売って有名になりたいですか」。虚を突か

れた。世界中からやってくるジャーナリストやカメラマンに対して、ベトナム人の間には強い不信感があると知った。

ベンハイ川は南北を分かち軍事境界線、いわゆる17度線に重なる河川だ。北を望むと対岸の様子がよく見えた。村人のボートがゆっくりと行き交っている。北の兵士の姿も目に入った。

私は意識が先に動いて、体が後からついていくようなところがある。このときも向こう側の様子を集中するあまり、川にかかる橋をふらふらと歩き出していた。橋を7、8メートルあたりまで進んだところで、北の兵士たちが色めき立った。歩いてくる私を見て警戒態勢をとったのだ。南の兵士が「撃たれるぞ!」と叫ばなかったらどうなっていたのか。

戦場に行って戦闘そのものを見たわけではない。しかし目に映るものすべてが戦争であると私は感じていた。

若い心が燃え上がっていた。ベッドが並び、蚊帳が天井に巻き上げられた宿舎でサイゴンの学生たちと話していたときのこと。どういう話題の流れだったか、感極まって「私はベトナムのためにお手伝いしたい」と口走った。

「ありがとう」。その言葉を聞いてベトナム大学生の一人が言った。「気持ちはいれしいけど、ベトナムのことはベトナムに任せてくれ。あなたは日本人なのだから日本のために力を尽くしてほしい」

その言葉に頭をがんとぐられたような気がした。お手伝い? 気持ちが高ぶっていたからといって、自分は何とあさはかな言葉を口にしたのか。「ベトナムを手伝う」と言って米国はこの国に介入し、今の状況を引き起こしている。私はこともあろうにそれと同じ言葉をベトナム人に向かって吐いたのである。

自分の無理解と愚かしさが恥ずかしく、情けなく、それ以上なにも言えなかった。しかしこのとき、私は「写真家になろう」と自分の心に約束したのである。人々に会い、写真を撮って、自分が見たものや聞いたものを広く伝えること。自分にできることはそれしかないではないか。だから、それをやろうと。そのときのことは忘れもしない。自分の人生を決定づけた瞬間だった。

ベトナム訪問を終えてカンボジアに入ったところで体調を崩してしまった。ベトナムでは120%の緊張状態にあったから、出国して一気に気が緩んでしまったのだろう。首都プノンペンで数日寝込み、少し復調すると外に出た。サイゴンとは対照的に街の雰囲気は穏やかで、人々のまなざしも柔らかい。オアシスのようだった。

カンボジアの学生らは隣国ベトナムの戦局を憂えていた。この4年後にこの国も戦火に巻き込まれることになる。平和がもろく、危ういものだということを私はまだ知らなかった。

(17) 分断

長崎には「被爆体験者」という奇妙な言葉がある。「被爆者」とは別の概念だ。

国が被爆地域と定めたエリア内で原爆被害に遭った人が被爆者で、そこから外れたところにいた人は被爆体験者。そういう区分である。なお広島にはこのような分け方は存在しない。

長崎には1997年から通い始めた。同じ被爆地でありながら、広島とは取材の手触りはずいぶん違う。その最たるものが先に述べた区分だが、背後にはこの地の歴史的な特異性があるとも感じた。

もとより45年8月9日に市内にいて原爆の被害を受けた人の苦しみは、広島の人々と何ら変わるところがない。

軍需工場で働いていたときに被爆した宮原マサ子さんは顔に一生治らぬ傷を負った。戦争で顔に傷ができてしまった女性の苦難は大きい。「一生悩むことになった。結婚もできませんでした」。写真を撮ることを宮原さんは許してくれた。困難な人生が刻んだ深い皺（しわ）と傷が混然となっていて、シャッターを押しながら胸が痛んだ。

顔といえば井手久枝さんも忘れられない。井手さん自身も被爆したが、自宅にいた母は右手に重傷を負い、肘から先を切断した。「命があればおまえと暮らせるけんよかったたい」と言っていたが衰弱し、井手さんの寝顔を眺めながら逝ったという。

井手さんは日雇い労働で4人の子供を育てた厳しい人生のなりゆきを達観したような口調で語っていた。この人は生きる苦しみをほかの誰かにではなく自分に話し、自分で聞いてきた人だ。そう思った。その目の光の強さ、面魂のすごみに射すくめられるようだった。

戦禍の記憶を刻む遺物・遺構の扱いは地域によって異なる。負のイメージを残したくない、お金は発展する方に使うべきであるなどの理由から、遺物の保存に必ずしも積極的ではない地域もある。

長崎市では爆心地に建っていた旧浦上天主堂が58年に撤去された。聖堂の早期再建という教会側の現実的な希望があり、撤去と保全をめぐって意見がせめぎ合ったが、結果的に古い聖堂はなくなった。

被爆した人々を訪ねながら、私は原爆体験をめぐる分断のようなものを感じずにはいられなかった。

爆心地である浦上地区にはカトリック信者が多い。江戸時代に始まる禁教と迫害のことはよく知られている。そこに原爆という災禍が重なり、今度は被爆した人が偏見と差別にさらされた。さらに被害者は被爆者と被爆体験者に分けられ、救済支援に差がつけられている。

長崎に何度通っただろう。訪ねるほどに、この町に走るいくつもの亀裂、その亀裂が生む分断を痛感させられる。複雑な思いを禁じ得ない。

「祈りの長崎」といわれる。被爆地として平和を希求する思いがひととき強いのは事実だろう。だが私が出会った人たちの心には広島の実験者と同じ苦悩と怒りがあった。それは心静かに平和を祈るという美しい物言いで片付けられないものだと感じた。

長崎にもっと早く来て人々の話を聞いておくべきだった。時間を巻き戻すことはできず、この世からいなくなった人に会うことはできないから。

そんなふうに悔い続けながら、追われるように写真を撮っていった。気づけば22年の時間が経(た)っていた。

(27) 前へ

半世紀にわたって写真を撮ってきた。伝えたい、と願ってきた。伝わるはずだと信じてきたというべきか。

だが己の微力のせいで届かなかった、と思う。この人生をかけて私はやってきたが、結局甘かったと。

戦禍の記憶を、傷ついた人々を撮り、写真を見てもらうことで平和の意味を考えてほしかった。だが自分の思いが十分に届いたという手応えはない。いま日本人は本当に平和の尊さをかみ締めているだろうか。

平和を守る起点は、戦争とはどういうものであるかを追体験することである。地政学的状況が変化する中で防衛力強化を急ぐのはリアリズムだという考え方があるのを知っている。だがその前に、ウクライナで、パレスチナで起きていることをあなたは凝視し、想像力を使って追体験しているか？

戦争について深く知ろうとせず、追体験を怠って平気な人は自分を甘やかしていると私は思う。

「関係ない」「興味がない」「面倒くさい」という人に問いたい。じゃあまた戦争するのか、と。自分で体験しないとわからないというなら、戦争をやって実際にその悲惨さを味わうしかないではないか。それを望むのか。

写真家としての私の歩みは新型コロナウイルス禍で突然止まってしまった。やり残した仕事をやらなければという思いと、その力が私に残っているだろうかという自問が交錯する。私は歩くのが速く、街を歩いていて人に抜かれることはまずなかった。だがコロナ禍から5年ですっかり足が遅くなってしまった。

こんな足で今のウクライナに行けない。ロシアのミサイル攻撃から逃げるとき、私は転ぶかもしれない。すると誰かが私を助けようとするはずだ。その誰かが巻き添えになることを私は恐れる。

この連載の最後に2人の師について記したい。

社会学者の鶴見和子さんはとても上品で頭脳明晰な方で、お茶を飲みながら、あるいは食事をしながらゆっくりと話し合った時間はかけがえのない人生の宝である。鶴見さんは人が生きるということにまつわるすべてを私に教えてくださった。

アフガニスタンの取材から戻ってきたときにこんな一首をいただいた。

〈アフガンの子らやいかにとカメラ肩に飛び立つ友よよく帰りませ〉

紛争地に取材に行く私のことをいつも心配し、しかし「あなたの写真は歴史なのよ」と励ましてくださった。その言葉を忘れたことはない。

もう一人、染織家の志村ふくみさんは生命に対する深い哲学を私に授けてくださった。蚕の命である絹糸。その絹糸を自然から賜った様々な色に染め、それを織って、着物として身にまとう。その意味の深さに肅然とした。

志村さんは次のような言葉を揮毫してくださった。

〈手によってすべての仕事は行われる/手の中に思考が宿っているといってもいい/私の掌の中で色は次第に自己を確立し、主張し、一色で立ち上ろうとしている〉

鶴見さん、志村さんの仕事の大きさの前では、私のやってきたことなど何ほどのものでもない。気弱になっている場合かと自分を叱咤する。撮るべき人がいて、伝えるべきことがあるのだから、この命のあるかぎり撮り続けよう。遅くなったこの足ででも、行けるところまで歩いて行こう。

大石先生の著書・写真集

『あすへの記憶』



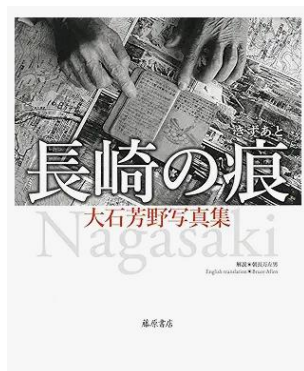
『戦禍の記憶』



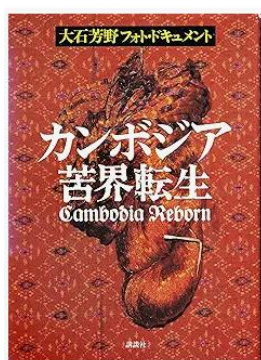
『わたしの心のレンズ 現場の記憶を紡ぐ』



『長崎の痕(きずあと)』



『カンボジア 苦界転生』



『福島FUKUSHIMA 土と生きる』



など多数